

おれを誰だと思ってる？ヒグマさんだぞ

親分

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ひよんな事からヒグマさんに転生した一般人。何度も唱えられ続けていたヒグマ最強説を実現させる為に幼き頃から己を鍛え上げた彼は何を思うのか。

※素人作品なので暖かい目で見て頂きたいです

目次

56 皇殺し編

ヒグマさん in ロックス海賊団	1
ヒグマさん in ゴッドバレー	5
ヒグマさん vs 金獅子 & ???	9
ヒグマさん vs 未来の四皇達	13
ヒグマさん vs 白ひげ	17
ヒグマさんとガープ	21

56 皇殺し編

ヒグマさん in ロックス海賊団

その男は青年時代、ロックス海賊団に乗っていた。

その理由はただ、儲け話がある、とロックスと呼ばれた海賊に言われて面白そうだから付いていっただけであった。

その船内では殺し合いが頻繁に行われていた。昼夜問わず、船内の至る所で断末魔が聞こえたり、怨嗟の声が聞こえたりもしていた。

何故そんなにも殺し合いが起きていたのか。

その理由は酒瓶を手に取り、がぶがぶと豪快に飲み干すこの男のせいであった。

「おいーてめえ、仲間殺しは止めろって言ってるんだろ…!!」

「おいおいニューゲート、この船に乗ってる奴は仲間じゃねえ。儲け話に乗った、ただの同業者だ。それにおれが吹っかけてるんじゃないよ。コイツらが勝手に突っかかってきただけだ。」

ハチノス、と呼ばれた島を出港した時は数百人規模の海賊団であったが、今では数十人程まで少なくなっている。ニューゲート、と呼ばれた男は後に四皇『白ひげ』と呼ばれる男である。そして乗っている組員も後に海賊として名を馳せる者達ばかりだ。そんな彼らをコイツらと呼び、返り討ちにしたその男は、襲ってきた者達の屍の上で酒を飲んでいたのである。

「マ〜マママハハハ、おいそれで何人目だ。お前に挑む馬鹿野郎の数はない。」

「56人目だ、リンリン。おれとの力量の差もわからねえ奴がいるとはな。」

「全くだよ。それと、何度も言ってるがおれと子作りしねえか？お前との子なら間違いなく最強の子供が産まれてくる。」

「お前はデカすぎんだよ。」

この男が殺したのは、生き残っていれば後に海の皇帝と呼ばれてもおかしくない程の実力者達だった。だがそれ程の実力を持つ者でもこの男の前では無力であった。

「ジハハハハ、振られてんじゃねえか、リンリン。おめえ何度目だ？
がつつく女はモテねえぞ。」

「うっさいねえ、シキ!!お前を今、殺してやつてもいいんだよ。」

「お前におれが殺せるとは思えねえけどな。」

リンリンと呼ばれた女は、後の四皇『ビッグマム』シキと呼ばれた男は後の海賊王とシノギを削る程の争いを起こす。そして今、その2人が殺し合いを行おうとした時、2人の前をある影が通る。

「今日こそてめえに勝ってやるッ!!」

「またか、お前。」

「おいおい、またやってるよ。どっちに賭ける?」

「カイドウに賭けねえ事は確かだな。あ、また吹き飛ばされた。…おいカイドウ!何度も年下に負けてちゃ立つ瀬がねえなア!」

「確かに。」

「王直!銀斧!黙ってろッ!」

カイドウと呼ばれた男は後に四皇『百獣のカイドウ』と呼ばれ、最強の生物として名を馳せるのだが、それはまだまだ先の話。金棒を担ぎ、両手で思いきりその男へと振り抜く。しかし、その男に届く事はなかった。

なんと指一本で、更には触れずにその攻撃を受け止めた。

そしてそのまま弾き飛ばす。甲板に勢い良くぶつかるカイドウ。

「しつげえな。たまには本気で相手してやるよ。」

「てめえ、船を沈めるつもりかッ?!」

「マゝマママゝマ。流石に止めねえとなあ。」

「ジハハハハ、いいじゃねえか!好きにやらせてやれば!」

カチャツ、と刀を抜く音が聞こえる。その様子に慌てた表情でカイドウの前へと立つニューゲート。リンリンもその攻撃を防ぐ為に立ち塞がる。

「一閃」

横に薙いだ一撃はその直線上にいる者、全ての命を奪う。

二人は全力を持って攻撃を受け止める。

「オオオオオオッ!!!」

「グッ…!!!」

「リンリンッ!!もつと堪えやがれ!!」

「うるさいねえッ!!おれに命令すんじゃねえッ!」

2人がジリジリと押され始め、男はそれを退屈そうに眺めている。すると自身を影が覆った。何かと頭上を見るとそこにはフワフワの実際の能力によって浮かんでいるシキがいた。

「ジハハハハ、傑作だな。——ぶへエアッ!!…てめえ、何しやがる!!」

「ハハハ、おれの上に立たれちや気分が悪いからな。地面に這いつくばってるそっちの方が似合ってるぜ。」

「面白え…!!それが最後の遺言でいいんだよなあ!」

「弱え奴ほどよく吠える。」

一瞬でシキの頭上へ周り、その頭へと武装色を纏わせた強烈な蹴りを放つ。

そしてカイドウと同じく甲板に激突する。いきなり攻撃を仕掛けられたことに激昂するシキ。その理由は不快だったから。その後、告げられた言葉は火に油を注ぐ事になる。

「てめえら、もうすぐゴッドバレーに着く。遊びは終いにしろ。」

「チッ!命拾いしたな!」

「おれはロックスの命令に従うつもりはない。別に続けてもいいんだぜ?」

「俺ア、ガキじゃねえからな。船長の命令には従うだけだ。」

ロックスの言葉で一触即発だった雰囲気は消え去った。そして興味を失ったのかシキにやっていた目線を、次は先程の二人へと向ける。

「凌いだか、やるじゃねえか。」

「てめえ、船諸共壊そうとしてんじゃねえよ——」

「お前覚えてろ——」

ニューゲートとリンリンはその元凶を作った相手に睨み付け、高らかに声を上げる。

「ヒグマアツ!!!」

後ろに結った黒髪と、額の右側にある大きな十字の傷が特徴的な男の名前はヒグマ。後にこの世界の主人公と相對する存在

(56 皇殺し達成…っと)

に成りすます一般人の話である。

ヒグマさん in ゴツドバレー

「あく痛え。大砲の音が頭に響きやがる。」

「ヒグマ！何してやがる!! さっさと来やがれ！」

「あ？誰にモノ言ってるんだ？」

「いや…俺の言い方が悪かつ——…!!」

「男が一度吐いた言葉を撤回してんじゃねえよ、腰抜けが。」

酒の飲みすぎで少し仮眠をしていたヒグマは寢室から頭を抑えながら外へ出る。

その前には剣を携え、今にも戦場へと赴かんとする一人の男がいた。ヒグマの姿を確認すると悪態をつく。だが、タイミングが悪かった。

ヒグマは二日酔いの状態な為、非常に不機嫌であった。

男が謝ろうとすると、腹部に鈍い痛みが走る。男の視認出来ない速度で前蹴りを放たれていたのだ。男はそのまま気を失い倒れる。

「おお、始まってんじゃねえか。酒がねえとやってらんねえよ。あれは…ロジャーとガープか？ハハ、海賊と海軍が協力しあってるのか。

——ん？」

船から島の様子を見渡すヒグマ。どうやらロジャー海賊団と海軍の両方を相手にしているようだ。船長であるロックスはロジャーとガープの2人を相手にしている。

ロックスの強さは他の船員とは隔絶したもののだが、あの実力者二人となると流石のロックスでも敵しそうだ。ニューゲートは副船長のレイリーと、シキは三番手のギャバンと戦っている。そしてロックスが二人を遠くへ吹き飛ばした後、懐にしまっていた電伝虫が鳴り響く。大方ロックスだろう、と頭の中で考えて受話器を取る。

『起きたようだなヒグマ。早くこっちへ来い。こいつら二人の相手をするのは厄介だ。お前も来て一気にカタをつけるぞ。』

「——おい、誰だ。おれの酒を飲み尽くしたやつは。」

『どうだっつていいだろう……とにかく——』

「予備の酒もねえ……てめえか。シキイツ！」

酒の残りが無くなった事をロックスに伝えると、心底呆れた声色の言葉が返ってきた。備蓄されていた筈の酒も全て無くなっている。犯人を探ろうと見聞色の覇気を全力で使用する。するとある男の気配が残っていた。それはヒグマが仮眠をする前に喧嘩をしていた金獅子のシキであった。それに気付き、ヒグマはシキへと大声を上げる。

「ジハハハハ、やっと気付きやがったか。俺様はやられたままじゃ気が済まねえんだ。お前の酒なんざ捨ててやったよ。」

「あの野郎……」

「悔しかったらこっちまで来いよ。バアーツカ。」

『おいヒグマ——』

戦闘中にも関わらず、ヒグマの方へと顔を向ける。ニタニタと人を小馬鹿にしたような薄ら笑いを浮かべるシキ。そして悔しがっている様子が確認できた為、最大級の侮辱とも呼べる様な顔をヒグマに向け、再び戦闘を始める。

それを見たヒグマは今にも堪忍袋の緒がキレそうなほど頭に血が上っている。

ロックスと通話中だったが強制的に終わらせ、電伝虫を懐へしまい、シキの方向へと体を向ける。

「面白えじゃねえか……！」

全身から霸王色の覇気が溢れ出す。その存在の濃さは、戦闘を止め、ヒグマの方へ視線を移されるほどだ。皆がゴクリと生唾を飲み込み、ヒグマの様子を伺っている程だ。それを見ているロックス海賊団の船員達は冷や汗を流す。

ロックスも思わず戦いの手を止めた。

「おいおい。ありやあなんだ、ガープ。あんなやべえ奴がまだいたの

かよ。」

「あの顔…手配書には載ってねえ。ここに来る直前の島で拾ったか何かだろうな。だが、あいつが敵になるとしたら、今の戦況が大きく変わるぞ…!」

「ヒグマアツ!なんて覇気だ…!最高だよお前は!!さあ、こいつらを殺して俺達で世界を変えようぜツ——!!」

ロジャーとガープは突如姿を見せたヒグマに警戒心を高める。その圧倒的な覇気に思わず冷や汗が垂れる。そしてロックスはようやくやる気になってくれたかと喜びの声を上げる。

「シキイツ!覚悟しやがれ!」

「うおツ!てめえ本当にこつち来んじゃねえ!戦ってんだろうが!!」

「——は?」

甲板から勢い良く飛び出たヒグマ。その威力の強さに踏みしめた甲板が粉々になる程。その矛先は『金獅子』と呼ばれる男へと向けられた。

1本の刀を振るい、シキを討たんとするヒグマ。だがシキもあのロックス海賊団を生き抜いてきた猛者の一人。そう簡単に命を奪わせてはくれない。その様子を見たロックスは呆けた声が漏れる。

「おい、そのサングラス野郎オ!こいつの相手は俺だ、邪魔すんじやねえぞ。」

「あ、ああ。」

ヒグマはギャバンに向かい、そう告げる。ここで対立してしまえば己が殺されかねないと思い、その言葉を飲むしかなかった。

「良い機会だ。てめえと本気で殺し合った事は無かったよなア!ヒグマアツ!!」

「お前が弱えからな。今すぐ大人しく酒でも買って詫びて、許しを乞うなら半殺しで許してやるよ。」

「ほぞけエツ!——」 獅子威し 地巻き ”イツ!!」

「 ” 六閃 ” 」

「…クソツ——!?!ぶべらアツ！」

フワフワの実の能力により地面を隆起させ、大量の土砂で出来た六体の獅子を作り出す。それはまるで巨人族を相手にしていると錯覚する程の大きさだ。それをヒグマに向け放つ。だがヒグマはピクリとも動かない。そして獅子達がヒグマを飲み込まんと大口を開けた瞬間、ヒグマはニヤリと笑い、その腰に携えた刀を抜く。

次の瞬間、シキによって作られた六体の獅子は地面と別れを告げる。ヒグマにより全ての獅子が一刀両断されたのである。そしてその両断された六体の内、一体の獅子の隙間からシキを捉え、即座に接近する。接近を許してしまったシキは回避は間に合わないと判断し、武装色の覇気で防御を固める。だが、そんなもの紙切れ同然と言わんばかりにシキの顔を歪ませるほどの力で殴り飛ばす。直に受けたシキは再び地面へと叩き落とされる。

「シキ、やっぱりお前には地面に這いつくばってる方がお似合いだぜ。」

「クソガキがツ……!!」

地面に倒れているシキを見て、ヒグマは愉快そうに告げる。

ヒグマさん V S 金獅子 & ???

「いい加減倒れたらどうだ…!」

「ハア…ハア…! ロジャーの勝利の報せを聞くまで…倒れる訳にはいかないな…」

「そうか…死んでも知らねえぞ…!!」

「敵の心配とは…随分余裕があるじゃないか…!」

肩がゆつくりとだが上下に動き、少し息を切らしているニューゲート。所々に切り傷があるが目立った傷は見当たらない。だが対照的にレイリーは右目は縦に斬られ、失明はしていないものの片目が見えないという、戦闘において非常に不利な状態に陥っている。

「後悔すんじゃねえぞツ!!」

「勝負の行方はまだ分からないさ…!」

「——ツ?!」

そう言ってお互いに剣を交わせようとしたその時、二人の間を斬撃が通り抜け地面に激突した瞬間、凄まじい突風が巻き起こる。吹き飛ばされまいと、二人はその場で踏ん張る。そして砂煙が晴れ、斬撃の飛んできた方向に視線を向けるとそこには空中で土で作られた巨大な獅子が現れては消える、そんな二人の戦いが見えた。

「——おいおいどうしたア! てめえの得意な空中戦だろツ!」

「この…バケモンがツ!! 斬波アツ!!」

「ひでえ事言うじゃねえか、俺だつてただの人間だぜ? ——三閃。」

「ゲフツ…! だが…準備は整った…!!」

「ああ?」

シキはフワフワの実の能力により、空中戦を最も得意としている。それは自他共に認める程の強さだ。だがそんな彼を鼻で笑うが如く、ただの脚力で渡り合っているのだ。空を蹴り、蹴る度にまるで爆発が起きたかのような衝撃が起きる程。その速度はフワフワの実を凌ぐ程だ。

シキは何度も獅子を作っては攻撃を試みたが、見事に全て切り落とされていた。こうなつては埒が明かないと両手に握っている刀を使い、技を繰り出す。その威力も他の者が見れば充分脅威となるが、その男の前では無力だった。それよりも強力な斬撃を放たれ、己の放った技と拮抗するまもなく身体を斬られる。

「てめえのその異様な強さ……何かの悪魔の実の能力なんだろ……？ 動物系か？ しかしそんなもの海に入れちまえば関係ねえ……！ これで終わりだアツ!!」

「…」

「てめえの馬鹿げた強さでも海には打つ手無しだったようだな……!! ジハハ……!!」

ヒグマのその強さは何かの悪魔の実の能力と推測するシキ。そして予め海へ飛ばしておいた斬撃により、海は斬られ、シキの能力が付与される。プカプカと空中に浮かんでいる海の塊をヒグマへとぶつける。全方向から襲ってきた海の塊に為す術が無かったのか、無抵抗のまま海の中へ引き込まれる。

「さあ、窒息させた後にてめえをどう殺してやろうか……ツ!？」

「誰を……殺すつて？——重・舞ドン・マイツ!!」

「てめえ能力者じゃ——ゴフツ……!!」

「残念、お前の推測はハズレだったようだぜ。」

シキは歓喜の笑みを浮かべ、ヒグマを捉えた海の塊を見る。殺し方を考え始めようとした矢先、その中から突然斬撃が飛んでくる。だが辛うじて回避する事に成功する。回避という行動を選択した為、ヒグマに向けていた注意が一瞬削がれてしまった。再びその姿を捕らえようと視線を戻すと、既に目前まで来ていた。そしてそのまま脳天に覇気を纏った蹴りを食らってしまう。白目を向き地面へと物凄い勢いで激突する。

「ヒグマアツ……!! さつきから攻撃がこつちに飛んできてんだよツ! それと、仲間を殺すのは止めろつってんだろうがツ……!!」

「——ツ! 流石はニューゲートだな。破壊力に関しては申し分ねえ。だが、芯を捉えられねえなら何万発食らっても俺は倒れねえぞ?」

空を飛んでいたヒグマに突然衝撃が走る。ニューゲートのグラグラの実による仕業だ。どうやら戦場でも仲間に出しているヒグマの姿を見て、我慢が出来なかったようだ。ヒグマは焦りの表情を見せることなくニューゲートと睨み合う。

「面白エ事してんじゃねえか、ヒグマア…、お前を倒してゆっくり子種を貰うとするよ。」

「ウオロロロ、こんなやべえヤツらの戦い、おれも混ぜやがれ。」

後方から、リンリンとカイドウが共にやってくる。相手はどうしたのかと覇気を使い確認する。どうやらロジャー海賊団の幹部達を息の根は止めず、気絶だけさせてこちらへと来たようだ。ニューゲートはヒグマを止める為、リンリンはヒグマとの子を産む為、カイドウは楽しそうな戦いに参戦しヒグマを倒す為、各々の目的がヒグマの為、一時的な共闘が出来上がる。

「てめえら邪魔すんじゃねえぞ。こいつは俺が倒す。」

「何を馬鹿なこと言ってるんだい白ひげエ。早い者勝ちだよ。」

「お前こそ邪魔したら殺すぞリンリン。ヒグマの首を取るのは俺だ。」

「カイドウ、お前に俺が殺せるわけねえだろ？」

突如、吹き飛ばされてきたガープにヒグマは話しかける。

「おいガープッ!!」

「…!?なんだ…!!」

「てめえらの船に酒はあるか?」

「ああ…、あるがそれがどうした?」

「この戦いが終わったらその酒を全部俺に寄越せ。それを約束できるならこの戦い、お前らの味方をしてやるよ。」

ヒグマのその提案した条件に疑心暗鬼なガープ。だが、今この場でこの男の相手をしては間違いなく負けてしまうと判断し、交渉を始める。

「…その後にお前が敵になる可能性は?」

「酒を貰ったやつにそんな事するわけねえだろ。」

「いいだろう…だがお前が怪しい動きを見せたら捕らえるからな。」

「てめえに俺を捕まえられるわけねえが…交渉成立だな。」

ガープが了承した事にヒグマは笑みを浮かべる。そしてガープは再びロックスを倒す為にロジャリーの元へと急ぐ。ヒグマが敵へと変わった事により唾然とした表情を浮かべる三人。

「酒の恨みは恐ろしいからなア。何人徒党を組もうが俺には敵わねえって事を教えてやるよツ!!」

ヒグマの体から霸王色の覇気が溢れ出す。気配が変わった事に三人は戦闘態勢に入る。そしてヒグマが刀を抜いたのを見た瞬間、無数の斬撃が三人の前に現れた。

「百閃煉魔——簡単に死ぬなよ?」

ヒグマさん V S 未来の四皇達

「うおおおおッ!!」

「なんだいこの斬撃は…!!」

「ぐうッ…!!」

白ひげは自身に襲いかかる斬撃を見事に弾いている。リンリンは幾つかの斬撃を止めきれず身体に切り傷が増えていく。カイドウは大半の斬撃をまともに受けてしまう。ヒグマの攻撃に対処出来るかどうかで、その強さが鮮明に見えてくる。

「へえ、死ななかつたみてえだな。」

「船で受けた一撃の方が重かった…ヒグマ、てめえ手を抜いてやがるな?」

「…さあな、俺はいつだって本気だぜ?お前らがそんな簡単に死ぬよ
うなタマじゃねえってこった。」

「ふざけた野郎だ…」

白ひげは一撃の重さに疑問を浮かべる。船の上での一撃はリンリンと二人がかりでようやく止めたが、今回は一人で受けきる事が出来た。それを問いかけるがのらりくらりとした返事に思わず呆れる白ひげ。するとヒグマの背後から近寄る者がいた。

「話ばっかしてんじやねえぞ。てめえの相手は、俺だアッ!!」

「カイドウッ、死ななかつた事は褒めてやるが、傷だらけじゃねえか。そんなナリで俺に勝てると思ってるのか?」

「俺と戦えッ!!——雷鳴八卦ッ!!」

「戦え?勘違いしてるようだから言っておくぞ。俺とお前とじゃ戦い
になんてならねえ——」

「ヴッ…!!」

「カイドウッ!!」

「一方的な蹂躪だ。」

カイドウは右手に握りしめた金棒をヒグマ目掛けて渾身の力を込めて振り下ろす。だがそれを避ける素振りもせず、左手のみで受け止める。そして利き手である自身の右手を固く握り締め、霸王色と武装色を纏わせる。その様子に焦りの表情を浮かべるカイドウ。そして回避しようとした矢先、まるで大砲の何十倍もの威力のある拳がカイドウの顔を捉える。ミシミシ、と嫌な音を立て遥か遠くへと吹き飛ばされる。

手に持っていた金棒はクルクルと中を舞い、地面へと突き刺さる。

「一発KOじゃねえよなア? まだまだいけ——」

「——威国ツ!!」

「おっと……リンリンか。」

「マゝママハハハ、こんな良い女を放っておいてカイドウと遊ぶなんて、嫉妬するじゃねえか。」

「確かに見てくれだけは良い女だ。だが、女には品がねえとなア。」

カイドウを追撃しようとしたその時、地面を抉りながら突き進んでくる、まるで大砲と勘違いするような斬撃がヒグマへと襲いかかる。

だが、ヒグマは特に気にも留める事はなく、何事も無かったかのように軽く弾き飛ばす。

「リンリン、どけッ!」

「ニューゲート——ぐうッ、中々の威力だ……!!」

ヒグマが攻撃を弾き飛ばす瞬間に白ひげは既にヒグマとの距離を詰めてきていた。そして自身の能力であるグラグラの実の力を使い、腹部目掛けて固く握り締めた拳をぶつける。大気が割れ、振動がヒグマの身体に伝わる。

そしてそのまま吹き飛ばされ、岩壁へと激突する。

「おい白ひげエツ!! 殺しちゃいねえだろうなア!」

「あのくらいで死ぬやつじゃねえよ……、だが妙だ。」

「あ? 妙だって?」

「アイツ、わざと俺の攻撃を受けやがったな」

リンリンが白ひげへと詰め寄る。殺す事が目的では無いため、もし

ヒグマの命が無くなっていたらという想定を起こし、怒声を浴びせる。だが白ひげは気にせず一つの違和感を覚える。

「確かに…船内じゃあどんな不意打ちでも避けていた筈…。」

「物心ついた頃から覇気を鍛え続けてた奴だ…俺の接近に気付かねえはずがねえ…！」

「——油断禁物だぜ？」

「な…きやあツ!？」

「リンリン!!」

「リンリンのやつも可愛い反応するじゃねえか。」

「ヒグマツ、てめえ何がしてえんだ…!!」

吹き飛ばしたはずのヒグマは既に二人の背後に回っていた。そしてリンリンの手首を掴み、カイドウが吹き飛ばされた方向へと投げ飛ばす。気配に気付いた白ひげは薙刀を振り下ろすが、ヒグマには届かない。片手で握っている刀によって止められている。

「酒の為に動いてるだけだ、文句ならシキの野郎に言うんだな。」

「海軍の持つてる酒がおめえを満足させる代物だと思いつてのか？」

「少なくともてめえの飲んでる酒よりは気に入るだろうなア。てめえの酒は俺の口に合わねえ。」

「それはまだおめえがガキだからだろ。」

まるで拮抗している様に見えるが、白ひげは両手で薙刀を握っているのにも関わらず、ヒグマは片手で抑えきっている。白ひげの頬に冷や汗が垂れる。

すると突然、見聞色の覇気により危険を察知する。目の前にいる白ひげを蹴り飛ばし、一人で迎え撃つ準備をするヒグマ。

「合わせなツ、カイドウツ！」

「てめえが合わせるんだよツ!!」

「お前らが合わせ技とはなア——」

「覇海ツ!!」

「受けて立とうじゃねえか。——死吟醸^{だいぎんじょう}」

二人から放たれた技はその直線上にいる者全てを巻き込みながら

突き進んでいく。その威力の規模に、思わず海兵達は目が飛び出す程の驚きを見せている。

ヒグマはニヤリと笑うと、十字に刀を振り、霸王色をのせた斬撃を繰り出す。

繰り出された技同士がぶつかり合うと一瞬で消滅した。そしてその一瞬で二人の元へと距離を詰めるヒグマ。

「ぶへっ…!!」

「さっきの技、良かったぜ。お礼にお前らの技を真似てやるよ。どうかア?——雷鳴八卦」

「ガハッ…!!」

「早く…俺の物になりなアッ!!」

「おれに勝つ事が出来たらなつてやるよ。——威国」

「ッ…!?!」

カイドウの顔面を殴り怯ませた事により、握っていた金棒が再び宙へと放り出される。それを掴み取り、カイドウが普段使っている技をお披露目する。ただの金棒を振り下ろすだけという猿真似だが、実力者が使う事により霸王色を纏わせ、その破壊力は絶大なものとなる。それはカイドウの意識を刈り取るには十分だった。

リンリンに対しても、振りかざされた剣を跳ね返し、得意技を真似て反撃する。リンリンは何とか防御する事に成功するがその威力を完全に殺す事は出来ず、力なく地面へと倒れる。それを見た、同じ船に乗っていた海賊達は目を見開く。

「これで二人脱落か?あとはお前だけみてえだな、ニューゲート。」

ヒグマさん vs 白ひげ

「さあ、闘ろうぜ……ニューゲート。」

「仮にも副船長のおめえが抜けるんだ。ケジメは付けてもらうぞ、ハナツタレ。」

「俺アそれを了承した覚えはねえけどな。」

そう言つてヒグマは己の得物を腰に携えている鞘から刀を引き抜く。その抜かれた刀身は黒く光り輝いている。それを見てニューゲートの眉がピクリと動く。

「相変わらずの存在感だな……その黒刀は。」

「やらねえぞ。こいつはおれがガキの頃から使つてる刀だ。」

「いらねえよ、そもそも俺の身体にはてめえのその小せえ刀は合わねえ。」

「はっは、生意気言うじゃねえか。鼻毛野郎。」

「これはヒゲだ、ハナツタレ」

その切先をニューゲートの方へ向ける。それに応え、ニューゲートも同じように己の得物である薙刀をヒグマへと向ける。一触即発の空気が流れる中、その空気を気にせず突つ込んでくる男がいた。

「裏切り者の首、取つたりイ……ッ!!——…ガッ………!!」

「早速こつちから行かせてもらうぜ?——ほら、プレゼントだ。」

「邪魔だ……!!」

同じくロックス海賊団の船員だった男がヒグマの首を取り、自分の実力を知らしめようとヒグマの首元目掛け刀を振り下ろしたが、一切視線を向けられずに振り下ろした刀を粉々に破壊された。それに思わず目玉が飛び出しそうな程驚く男は次の瞬間、一撃で意識を失うほどの衝撃に襲われた。

地面に倒れこもうとするが、それをヒグマは許さない。その男の頭を掴み、ニューゲート目掛けて投げ飛ばしたのだ。それを受け止め、辛うじて意識の残っている男に睨みを効かせ、その場から退却させ

る。

「てめえはあの船でヒグマの何を見てやがったんだ……!!死にたくねえならさっさとこの場から消えろオツ!!」

「……あ……アあ……ツ……」

「行くぞ、ヒグマアツ!!……ぬうウウンツ!!」

「流石だなアニューゲートツ!!また一段と覇気が強くなりやがったな!!」

「簡単に受け止めやがって……皮肉にしか聞こえねえぞ……!!」

世界でトップクラスの實力者のぶつかり合いが始まった。当然の様に霸王色を纏う二人は、その衝突で周囲にいる者たちの意識を刈り取っていく。

「おおおおツ!!」

「——おいおい、島を沈める気かよ。」

拳を握りしめ、力任せに叩き潰さんとするニューゲート。周囲への被害など気に止めない。全力で目の前の男の相手をしなければ、勝機は限りなくゼロに近いと判断した。だがヒグマは刀を鞘に戻し、その拳を片足一つで受け止めて見せた。グラグラの実による衝撃などまるで意に介さない様に、平然と立っている。

「涼しい顔しやがって、若造が……」

「そんなに怖い顔してちゃアリンリンの所のガキに怖がられるぜ?

ニューゲート。——おらア!!」

「ぐうツ……!!」

衝突し合っていたニューゲートの腕を弾き返し、腹部ががら空きになる。すかさず懐へと侵入し覇気を纏った足で蹴り飛ばす。ニューゲートは思わず苦悶の表情を浮かべる。

「やっぱりてめえは他の奴らとは一味違えなア!!」

「ゲフツ……!舐めやがって……この……ハナタレ小僧がよ……ツ!」

そして吹き飛ばされている最中であるニューゲートに追いつき、怒涛の蹴りを連発しそのまま岩壁へとぶつかる。腹目掛け伸ばしていた足を下ろそうとした瞬間、その足を掴まれる。

「まだ意識あつたのかよ。」

「……人の腹を何度も蹴りやがって。サンドバッグじゃねえんだぞ……!!」

「おオ……!?!——!!」

「おおおおおッ!!!」

その掴まれた足を起点に振り上げられ、地面へと叩きつけられるヒグマ。その衝撃で地面にクレーターが出来上がる。そこから更に追撃として、ニューゲートの固く握り締められた拳がヒグマの顔面目掛けて直撃する。そこから大気や地面が割れ、広範囲に被害が拡大していく。ヒグマを中心に地面が二つに割れた為、その隙間へと落ちていくヒグマ。

「……………」

「——効いたぜ、少しな。お陰で酔いが覚めた。」

落下途中で体勢を変えて空を蹴り、当然の様に戻ってきたヒグマ。効いた、と言っているが血の一滴も流していない。その表情はまだまだ余裕がある事を暗に示している。

「さ、ここから第2ラウンドの始まり——」

「——ガープ中將がロックスを破ったぞオ……ッ!!!我々海軍の勝利だッ……!!」

「ロックスの野郎が…負けたか。ははは、やるじゃねえかアイツら。お前は どうするんだ? ニューゲート。」

「船長が負けた以上、この海賊団は崩壊する……。そういうヤツらの集まりだからな、てめえとの戦いもこれで終いだ。」

一人の海兵が皆に響くような大声で叫ぶ。その知らせにロックスの手下達、更に海兵達も動きを止める。そして一瞬の静寂の後、歓喜の声がそこら中に響き渡る。

「おれアこれから自分の海賊団を作ろうと考えてる……。なあヒグマ。」

「なんだ。」

「お前…おれの息子にならねえか?」

「……そう言われるまでもなくおれア——いや、これはてめえが死ぬ

時にでも伝えてやるよ。じゃあな、またどこかで会おうぜ。」

「……あア。」

別れの言葉を伝え、その場を後にするヒグマ。そんな男が向かう先は戦いの最中に口約束をしたあの男の元。

「貴様ツ!!海賊——!!」

「あ?おれはこいつから報酬を受け取りに来ただけだ。」

「——」

「……まさか気絶してんのか?——仕方ねえ、起きるまで待つか。」

こうして後にゴツドバレー事件と呼ばれる戦争は終わりを告げた。

ヒグマさんとガープ

「ここは……………?」

「ガ…、ガープさんッ!!身体に異常はないですか?!ここは軍艦の医療室です…!!」

「ああ、大丈夫だ。」

「無事に目を覚まして良かったです…!!」

「皆に伝えに行くぞッ!」

ガープが目を覚ますと、周囲には心配そうに見守っていた沢山の海兵が歓喜の声を上げる。その中にはこの場にはいない他の海兵達に、ガープが目を覚ました事を伝えに大慌てで部屋を出ていく者もいた。

「——よオ、目が覚めたみてえだな。」

「お前は…………」

「すみませんガープさん…!!我々は止めたのですが無理やり——」

「気にするな。こいつが居たおかげであの時の戦況は大きく傾き、おれはロックスとの戦いに集中する事が出来た。……それに契約の件もある。」

「契約…………?」

甲板に出る海兵達とすれ違う様にガープのいる医務室へと入っていくヒグマ。一人の海兵はヒグマを乗船させた事に申し訳なさそうな表情を浮かべる。

「誰か…今すぐ酒樽を持ってきてくれないか?事情は後で説明する。」

「酒樽…………!?!…………ガープさんがそう言うなら…」

そう言っただけで残っていた海兵は酒樽を取りに部屋を後にする。

「そーいや自己紹介がまだだったな、おれの名はヒグマ。——無理に起きようとすんな、お前は怪我人だろ。」

「悪いな…助かる。お前もおれの名前を呼んでたから知ってるだろうが、ガープだ。よろしく…、ヒグマ…聞いた事ねえ名だ。…それより、お前の強さには驚かされた。どうしたらあんなに強くなれんだ？」

「…自分を鍛えまくった。ただそれだけだ。」

ドアの横に立ち尽くし、ポケットに手をつ込み、ガープと話をするヒグマ。身体中を包帯で巻かれているガープは、ベッドから体勢を起こそうとするが、ヒグマに止められ、横たわったまま話をする。

「…その額の傷は誰に付けられたんだ？」

「これは…いや、そこまで話してやる義理はねえ。」

ガープの疑問にそう告げるヒグマ。触れられたくない話題だったのかヒグマの纏っている雰囲気少し重くなった事を察したガープ。素直に謝罪の言葉を送る。

「すまん、詮索が過ぎた。」

「大丈夫だ、気にしちやいねえよ。素性が気になるのは当然だからな。」

「…協力はしてくれたが、お前は海賊なのか？何故ロックスの船に乗っていた。」

「尤もな質問だな…単純に自分を鍛えてえから乗ってた。あいつの下にはニューゲートやリンリン、シキの他にも手応えのあるヤツらが乗ってただろ？鍛えるにはうってつけだったって訳だ。」

「民間人には手を出してねえのか？」

「弱エ奴には興味なんざねえ、それにカタギに手出すつもりもねえな。」

ヒグマから出た言葉にどこか納得したような表情を浮かべる。

数回言葉を交わしただけだが、その言葉が嘘では無いとガープの中で確信する。

「ああ、それとおれを海軍に入れてくれ。」

「そんなことか、いいぞ。」

※※※※※※※※※※

「とうわけで連れてきた。」

「よオ、あんたがコング元帥か。これからよろしく頼むぜ。」

コングと呼ばれた男は、ガープの連れてきたこの男も間違いないく問題児になるだろうと頭を抱えるのであった。